

【書 評】

迎由里男著『戦前期都市銀行史研究 安田銀行を中心に』 （日本経済評論社、2023年4月刊）

法政大学

名誉教授 霧見 誠良

本書は両大戦間期の都市銀行の動向を巡って安田銀行を中心に光をあてた大作である。都市銀行の発展について、これまで積み上げられてきた膨大な金融史研究を踏まえつつ、得難い内部資料を駆使して新たな事実を積み上げる、その周到な実証精神に敬意を表する。

表題にあるように、本書の標的は「都市銀行史」「安田銀行」にある。都市銀行とはなにか。金融史の研究では様々な点から光をあてられてきた。加藤俊彦の財閥＝機関銀行論、石井寛治の都市銀行分岐論、柴垣和夫の日本金融資本分析、伊牟田敏充の重層的金融構造論、杉山和雄、浅井良夫らの財閥金融論、近くは粕谷誠のユニバーサルバンク論などが浮かぶ。それらを貫く共通のイメージは「日本の金融を支配してきた大銀行」である。金融史が目指してきたのは、それがいつ作られ、どう変転したか、その構造を明らかにすることにあつた。これらの議論を貫くキーワードは「都市銀行」にあり、問われた論点は、(1) 財閥由来の「都市銀行」が抱える「閉鎖」構造、(2) 都市銀行と地方中小銀行の「分断」構造、(3) 金融市場における「寡占」構造などである。それはいずれも、日本の金融が抱える構造的特質を巡る様々なリフレインである。本書はこうした「都市銀行」の戦間期の構造を、安田銀行を軸に光をあてた研究である。

本書は8つの章からなる。前半は1920年代、後半はそれ以後からなる。

第1章では、都市銀行が各々どのような顧客層と取引していたか、そこから都市銀行の幾つかのタイプを析出する。顧客対象として大企業

のみならず中小商工業者にも目を配る。『大日本商工録』の3都データと『全国株式総覧』（1925年）大企業データを軸に、大口取引ならびに社債引受データを加え、都市銀行について4つ（二流都市銀行を含めると5つ）のタイプを析出する。

- 1) 三井、三菱—取引は財閥系を軸に大企業に集中し、中小商工業者相手は少ない。
- 2) 住友、第一、安田、十五—二流財閥系を中心に大企業と取引、中小商工業者とも広範に取引する。
- 3) 川崎、第百、三十四、愛知—繊維、商業、公益を中心に大企業取引もあるが、都市の中小商工業者が重要な顧客である。
- 4) 山口、加島、近江、名古屋、鴻池、明治—大企業取引は限定的で、中小商工業者を主たる顧客とする。
- 5) 都市二流銀行は中小商工業者を主たる顧客とし、大企業とのかかわりはもたない。

都市銀行のタイプ分けとしては、これまでも三井と安田の違いなど、金融史では一般的なイメージとして定着している。しかしながらこれらの研究は、いずれも個々の銀行を比較するに止まる。都市銀行「全体」を「群」として取り上げ実証的に検討した研究は、これまでのところみあたらない。本書が嚆矢であろう。カギは取引銀行を巡る網羅的な顧客データ分析にある。本書の功績はここにある。これによって財閥研究における「閉鎖」性が解かれたとあってよい。

第2章は「都市銀行と地方銀行」の関係である。第一の論点は「都市銀行がどれほど地方に進出したかである。都市銀行の支店が地域別にどう

増減したか。大戦期とその後の不況を通して、三井・三菱以外の都市銀行は店舗網を充実し、支店銀行として安田に遜色なきまでになった。進出先は6大都市中心であったが、地方の拠点都市にも及ぶ。

第二の論点「銀行合同」について。問題は都市銀行の吸収合併がどれほどの規模だったか、その評価にある。都市銀行の『社史』を頼りに合同一覧表を作り、20年代三井を除く都市銀行は銀行合同に「積極的」であり、動因として第一次大戦後の金融不安を挙げる。貸出の固定化に悩む都市銀行は預金の拡大を求め、地方の中小銀行は経営の安定のため大銀行へ依存を強めた。以上の議論は、これまでの金融史研究からみて大きな異議はない。本書の意義は、こうした都市銀行群の合同行動を、第一章で展開した顧客分析と重ね合わせたところにある。三井が消極的だったのは顧客が安定的な大企業中心だったからであり、その他の都市銀行が積極的だったのは、不安定な中小商工業者を抱えたためであると。「都市銀行の地方進出は地方金融に大きな影響」を与えたと評価する。

つづく第3章では金融財閥安田の経営動向とくに「預金・貸出構造」に光があてられる。安田銀行は1923年11行大合併により、三井・三菱に並ぶ大規模銀行へ、会社形態も個人銀行から株式銀行へ転換した。この変革によって銀行の経営はどう変わったか。著者は支店長会議録から結城豊太郎の言「地方金融に消極的な方針は見いだせない」を引く。新生安田銀行は三井・三菱並みの統一的な支店管理を求め、預金・貸出金利の引き下げ、貸出規程の厳格化、都市優位の支店改廃を断行、それが地方金融に抑制的に働いたと評価する。

統合によって安田銀行は預金規模を飛躍的に拡大したが、20年代末に入ると停滞に転じ、危機を迎える。なぜか。その原因を預金の短期化に求めた。業種別には農・商工業者の小口預金や同業者預金のウエイトが高かった。その結果、都市のシェアが落ち、地方が上昇したことをも

って、預金面で地方店舗は「大きな意義をもっていた」と位置づける、貸出においても、浅野財閥系大企業向けが焦げ付くなか、都市間屋層や地方商工業者向け取引が「きわめて大きな比重」を占めたと評価する。

つづく第4章では製糸金融が取り上げられる。「都市銀行にとって製糸金融はどのような役割を果たしたか」、分析は信濃銀行を軸に行われる。明治期長野製糸金融の主要な位置を占めた信濃銀行が、日露戦後行き詰まり、その整理・再建を安田銀行が担い、系列銀行となる。その経緯ならびに地方銀行群との「依存」関係、第十九、六十三銀行との「競合」関係が明らかにされる。30年代生糸不況のなか、三井など都市銀行の取引先であった生糸問屋や輸出商が没落、安田銀行は片倉など大製糸会社との直接貸出を始め、貸出の主力として製糸金融を続けた。その理由として製糸金融が「リスクだったがリターンも大きかった」と「コストと収益」を挙げる。

後半2つの章は戦時金融下の安田銀行に光をあてる。第5章は統合政策における金融当局と都市銀行の攻防が明らかにされる。日銀・大蔵省は、地方銀行を「一県」さらに「一経済圏」に統合、都市銀行は下位行を統合し、都銀と地銀の「資本的連携」を排除する策をとった。統制下危機感を抱いた都市銀行は資金拡大を目指し大合同へ踏み切る。地方合同により安田銀行の地方金融は大きく傷ついたが、大都市への店舗再配置によって緩和された。また「財閥色の一掃」もならず、総じて「実質的に打撃を受けることはなかった」と評価する。

第6章では戦時金融下の安田銀行の経営が検討される。顧客層がそれまでの製糸・織物業者や中小商工業者から軍事・統制会社や大企業へ重点を移したこと、預金の短期化と貸出の長期化によって「期間のミスマッチ」が生じたが、安田の「店舗数の優位」がプラスに働いたことが明らかにされる。

安田銀行が戦時金融下大きく変貌するなかで、安田財閥も変容を迫られる。第7章は安田保善

社の財務を検討する。安田財閥は積極的に重化学など大企業への投資を展開したが、合名会社保善社の資金力は細く、資金の多くを関係会社が分担せざるを得なかった。その結果保善社の力は弱まり、安田銀行を中心とする融資系列が形成され、戦後につながる。

最終章は安田財閥の対外進出としての正隆銀行をとりあげる。対外投資に対し善次郎は後ろ向きではなかったこと、正隆銀行が安田銀行系列となった経緯、その後破綻に至る正隆銀行の経営状況が明らかにされる。安田が対外投資に積極的だったのは製糸金融と同様「高リスク、高リターン」であったこと、正隆銀行が破綻したのは、内地には厳しい保善社の監督が海外には及ばなかったためであった。

以上、本書の梗概を簡単に紹介したが、大筋は以下のようになろう。

- (1) 両大戦間期、都市銀行について顧客層を分析し、5つのタイプを析出した。
- (2) 安田銀行の顧客は中小工業者に中心があり、大企業向けは漸進的に増加したに止まった。
- (3) 安田銀行は一貫して地方金融にかかわり、大きな影響力を発揮した。

本書の貢献は、安田銀行の地方金融へのかかわりを、都市銀行の顧客分析から明らかにした点にある。これまでの研究蓄積を一つ一つ吟味する一方で、新しい視点、方法が組みこまれている。次に、それらの試みを金融市場史の視角からあぶり出す。

都市銀行とは何か。一般に金融市場において独占的地位を占める大都市の大銀行を指す。著者は「都市銀行」というとき慎重に「独占」の言葉を避けるが、これまでの研究から「都市銀行」の含意として「独占」を含む。独占的地位とは大銀行による市場「支配」を意味するが、日本ではそれが都市銀行と地方銀行の分岐として現れ、都市銀行が地方金融に対し如何に影響・支配したか、ここに研究が集中した。それは金融市場の分断という条件で「独占」を論じるひと

つの回路であった。

重層的金融構造論以来、都市銀行による地方銀行「支配」関係として、コルレス・資金貸借・株主・役員派遣の4項があげられてきた。最初の二つは銀行間の資金取引であるのに対し、後の二つは組織・人的な関係である。いわば横に広がるオープンな資金関係と縦に連なる閉鎖的な支配関係からなる。著者は4項全体を「親子」関係、後の2者をとくに「系列」関係と、濃淡をつけ位置づける。この二段階の定義によって、銀行間の関係として資金取引と人的組織の双方をカバー、巾広く議論できる。反面、市場における資金取引を「親子」という人的系列に読み込んだために、「市場競争」よりも「支配」にバランスが傾くこととなった。以下、本書において「支配」の後景に埋もれ勝ちの「市場競争」分析の試み、貢献に光をあてる。

第一の貢献は「銀行群」の分析である。

市場競争を巡っては、伝統的な方法として産業組織論的アプローチがある。それは市場構造・市場行動・市場成果からなる。これまでの金融史研究でも暗黙裡に、寡占→カルテル→過大利益が想定されてきたが、必ずしも厳密に議論されてこなかった。それは対象が「分断する金融市場」だからであろう。これまで分断市場において「独占」を論じる一つの方途として、都市銀行を頂点とする縦の系列構造が取り上げられてきた。本書でも、安田銀行など都市銀行が地方金融市場に「大きな影響」を与えたと強調される。しかしながら、舞台は分断した金融市場である。独占を説くには、個々の市場それぞれで都市銀行が競争上独占的な位置を占めたことを示されなくてはならない。そのためには個別の銀行ではなく、金融市場を舞台に行動する銀行「群」の分析が必要である。本書が展開する都市銀行分析は、こうした「群」としての銀行分析の先駆けとして高く評価されよう。

都市金融市場分析で見せた銀行群という斬新な方法は、長野の製糸金融においてもみてとれるが、必ずしも本書全体を貫く方法とはなっ

いない。もちろん本書の狙いが安田銀行にあり「支配」を重視したからであるが、「群行動による地方金融市場」というもう一つ途を蔵していた。それによれば、都市銀行の地方金融市場にたいする「影響」も一味違ったものになったかもしれない。そのためには全国各地の地方金融市場の群行動分析が必要である。銀行のみならず信用組合、無尽、貸金業者を含む広い群市場分析が求められる。それは言うまでもなく本書の域を超える。おそらく本書が金融史研究に投げかけた将来の課題かもしれない。

第二の貢献は「収益・コスト」利益分析である。

伝統的な市場構造→市場行動→市場成果アプローチのうち、これまで日本金融史においても最初の二項については寡占構造や金利協定など議論されてきたが、最後の市場成果については立ち入った分析をみない。市場成果は利益率あるいは資本効率で示され、銀行においては利益率や経費／収益率などで観測できる。その試みの一端が本書に組み込まれている。銀行経営分析の要所要所で、本支店ごとの預金金利と貸出金利が掲げられ、利益がどこから生まれるか一目でわかる（表3-5、4-21、6-3、6-4、5）。経営分析にとってこの金利表は極めて重要である。これまでも個別銀行史で部分的に記述されることはあっても、統一的にまとめて議論されることはなかった。

利益の源泉がどこにあるか。本書では、安田銀行が内部で作成した預金・貸出金利表がその一歩である。「収益利子・割引料」－「預金原価」＝「差引損益」から構成される。それぞれ当時の貨幣単位である銭・厘・毛で表示されるが、1924年は銭1桁にすぎない。表記はもともと原資料からと思われるが、そうであれば統合直後安田銀行の「収益・費用」は大まかなものであった。おそらく本支店間の金利差がみえればよかったのであろう。

ここで注意すべきは、ここで使われる「預金原価」は市場金利ではなく「内部金利」である点である。「預金原価」は各店の預金構成の影響

を受ける。たとえば当座預金あるいは払込資本金はコストとして計上されないし、小口預金や借入金の金利は定期預金とは差がある。著者は「6大銀行の預金コスト」（表6-5）では一応その点を考慮している。安田銀行が預金の短期化のなかで、本支店金利表において預金構成を考慮していなかったとすれば、支店コスト管理の点からして興味深い。

つぎの問題は利益であるが、これについては1か所、上位支店の純益額（表3-10）が挙げられている。本店の純益は全体の76%、他店と桁が違ふ。これに対して年が異なるが1924年本店の「差引損益」は100円あたり0.1円、16店中下から2番目にすぎない。このギャップはどこから来るのであろうか。これに対して製糸関連5店舗の利益はあわせて5%にすぎない。利益形成における貢献は、本書が強調する製糸関連店よりも本店が際立っている。そのメカニズムはみえない。

資本成果の指標としては、利益率あるいは経費率（経費／収益）などがある。本書の利益アプローチは「収益とコスト」分析に止まり、そこまで及ばない。また利益がどのように配分されたか、利益配分についても触れるところがない。利益率あるいは配分のありようは、次期の銀行経営に影響を及ぼす。市場構造→市場行動→市場成果の因果関係は、双方向の因果関係である。著者が目指す金融「支配」のありようは、構造⇔行動⇔成果の双方向の分析によって明らかにされる。そのためには利益論が不可欠である。

本書は周到な実証と新しい試みに裏打ちされた第一級の日本金融史研究である。そこに埋め込まれた金融市場史の観点に光をあて、展望を試みた。金融史における新しい歩みを喜び、評を結ぶ。